慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	石神裕之君提出博士学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.1 (2006. 6) ,p.151- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060600-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ならば、中世アラブの教育社会史にかんするこれまでの欧米の先行研究を本当の意味で超えることができたのではないかと思われる。しかし、違った見方をすると、本論文は、将来さらに深めかつ高めていくべき、そのような研究の基本的な方向性と適切な方法を、そして有効な史料を具体的に提示しているという点では高く評価できる。

このように本論文にはいくつかの要望すべき点が残されているが、後期博士課程の修了者に与えられる学位としての学術博士号の要件、すなわち専門的な研究者として自立できるだけの訓練、能力、学識という点からみて阿久津君の提出論文はそれに十分に耐えるものだと判断する。さらに、研究の独創性、その成果が研究上、新しい知見を加えているという点からみても阿久津君には自立した研究者としてそのスタートラインに立つ資格があると考える。こうした諸点に鑑み、審査員一同は、阿久津正幸君に博士（史学）の学位を授与することが適当と判断するものである。

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学　文学部教授　坂本　勉
副査　慶應義塾大学　商学部教授　湯川　武
副査　慶應義塾大学　文学部助教授　長谷部史彦

石神裕之君提出博士学位請求論文審査報告

論文題名　関東地方における近世庚申塔の考古学的研究

論文要旨

石神裕之君提出の博士学位請求論文「関東地方における近世庚申塔の考古学的研究」の内容は、以下のように、序章と終章とを含め、合計一〇の章からなり、総ページ数は二〇六である。

序章　近世庚申塔研究の目的
第一章　近世庚申塔研究の歴史と視座
第二章　近世庚申塔研究の型式学的分析
第三章　近世庚申塔の主尊に対する考古学的分析
第四章　近世庚申塔にみる施主名称の史的変遷
第五章　近世庚申塔にみる造立期日銘の検討
第六章　武蔵国荏原郡馬込村の庚申塔施主
第七章　近世庚申塔の造立習俗の展開と村落社会の変化
第八章　近世後期の庚申塔にみる石造遺物の盛衰
終章　近世庚申塔研究の地平

本研究は、近世村落の歴史と密接な繋がりをもつ庚申塔を、主に考古学的な立場からその資料性を整理、分析し、それによって得られた知見を、同時代の文献史料や民俗学的研究が示す結果などと対比させて議論したものである。つまり、庚申信仰

の供養塔としての物質的資料である庚申塔を、その形態や造立意識の変化から、歴史的、社会的意味を追求したものである。

第一章の「近世庚申塔研究の歴史と視座」においては、庚申塔に関する研究の流れを、墓石などの数多い他の石造遺物研究史をも視野に入れ、極めて詳細に振り返っている。その結果、庚申塔研究は戦前と戦後とを通じて、石塔や描かれている像容など物質的資料の側面や、銘文などが示す信仰的側面を対象として進められてきたが、それらの多くは、具体的な実証性を伴わない経験主義的な手法によって行われてきた、とする。すなわち、既往の研究には庚申塔の変化から、その信仰の変化や近世村落の生活史に踏み込んだものが少なく、庚申信仰の「存在」を確認し、民間信仰の実態解明という内容に留まるものが多いと指摘する。

したがって、石神裕之君による本論の主眼は、物質文化の時間的および空間的な変異をとらえることに適した考古学的手法を主軸にして、資料の収集、整理、分析をこの庚申塔にあてるところにある。こうした目的に従い同君は、近世庚申塔の研究に関連する数多くの学問領域を文献史学、民俗学など七つに集約した上で、「技術」「社会」「信仰」の三つの領域が大きくリンクすると整理した。そしてこれらのそれぞれの領域に対し、本論で採用する考古学的視座・手法の有効性を述べている。

次の第二章「近世庚申塔の型式学的分析」では、論者本人によって設定された分類基準に基づき、主に庚申塔の形態の差異による型式分類が行われた。そして、その分類結果が示す時間的変遷と分布の地域的な特徴および、その両者の関連などが分析された。集成、分析された庚申塔は、現在の東京都区部から一六二八基、東京周辺部の一〇市町村における二六四〇基、の総計四二六八基に及ぶ。一人の研究者による集成としては例を見ない数量であり、都区部と日本橋から一〇里の範囲という地域の広さも従来にない規模である。

この章で、型式学的に大きく七つの類型に分けられた関東地方の近世庚申塔に関する分析からは、主に三つの成果が抽出された。第一に、一七世紀前葉から一九世紀中葉ころまでの庚申塔の形態は、流行性の高いものと長期間にわたり存続するものとに分かれるなか、この地域における主要なタイプはほぼ同様の変遷過程を経るという斉一性が確認された。第二に、地域ごとの各型式の分布を調べた結果、都区部とその北部が類似する一方、八王子付近の内陸部では、相互に類似した分布を示すなど、流行した型式に地域的偏りがある点が認められた。第三に、上記二点の結果も踏まえ、庚申塔の造立時期が都区部より周辺部が一様におくれる傾向の中で、一部の遠隔地では早く出現する地域もあるなど差異が認められることから、当時の物資輸送路を検討することの重要性が示唆された。

第三章「近世庚申塔の主尊に対する考古学的分析」では、庚申塔に表された主尊を大きく「文字」と「像容」とに区分し、それらの多様な出現のヴァリエーションや時間的変遷を定量的分析によって整理している。その結果、主尊には流行性があり、一七世紀当初には、「文字」「像容」ともに多様で複雑であるが、

その後は概ね「青面金剛」文字塔―青面金剛刻像塔―「庚申塔」文字塔という変遷過程を辿り、その傾向は斉一的で地域的な偏りはほとんどない、としている。このことから、一七世紀には、庚申塔の施主が個別に主尊を選んでいたために複雑な様相を呈したものとし、当時においては庚申信仰の主尊が未確定であったことを反映していると解釈する。そして、その後の変遷からは、次第に青面金剛が主尊となっていった過程が読み取れるとする。さらには、一九世紀以降において、主尊が像容から「庚申塔」文字塔に変化したのは、信仰的要素が減少した結果だとみる。

第四章「近世庚申塔にみる施主名称の史的変遷」では、庚申塔の史料的側面に着目し、とくに施主名称の分析から庚申塔の造立者の性格や社会的機能の解明が試みられている。

すなわち、本章で行なわれた東京都区内の庚申塔の分析結果によれば、かつて竹内利美が長野県東筑摩郡の調査において指摘したように、一八世紀以降に施主名称が「連名（連記）」から「講中」へ変化したことが確認でき、これをさらに一歩すすめて「結縁者」的個人主体の施主―「個人」主体の講による施主―「集団」主体の講による施主という時間的な変化が概ねとらえられるという。そして、過渡的様相を呈する一七世紀後半において、庚申塔造立者は個人主体であったが、集団組織へ志向する流れの中で、各地域の人々が独自の対応をとった結果として、施主名称の多様性を生んだと解釈している。こうした解釈は、従来の庚申塔の施主名称の分析結果をより深化させ、庚申塔造立集団を復元する可能性をうかがわせている。

第五章「近世庚申塔にみる造立期日銘の検討」においては、前章と同様に庚申塔の史料的側面に注目し、庚申塔の造立期日を検討している。

それによると、庚申塔の造立は季節的には、大きく「春」あるいは「秋以降冬」のいずれかに行われ、東京北部では九月、東京西部・南部では十月造立が多いという地域的特徴が認められる。また、板橋区で二月造立が多いのは、中世以来の石塔造立のあり方を踏襲したものとされる。さらに、造立日と庚申日との関係では、一八世紀前半以降に「吉日系」が主流となるが、これは施主名称が「講中」となっていく時期に重なっており、講の組織化・娯楽化、庚申日を重視しないなどの庚申信仰の変化が認められるとしている。この点は庚申塔の銘文の分析にもとづく興味深い指摘である。

第六章「武蔵国荏原郡馬込村の庚申塔施主」は、東京都大田区旧馬込村地域の庚申塔の施主の社会関係を通して、村落内の社会組織のあり方をとらえる試みである。

その結果、一八世紀以降の当該地では、庚申塔の施主は所属する小名集落を意識しており、階層や支配村の枠を越えた多様な人々によって形成されていたという。そして、施主の結集要因は居住集落や耕作地など日常生活と密接に関わるまとまりを基軸としている可能性が指摘されている。こうした分析は、特定の村落内における庚申塔の研究成果が、近世村落史や農村社会学の研究成果と連携していく方向性を示している。

続く第七章「近世庚申塔の造立習俗の展開と村落社会の変化」では、庚申塔の形態、像容、造立数を比較、検討して、庚申信仰や講組織の変化をたどり、近世村落社会の解明を試みる。

庚申塔の像容は一七世紀前半には多様であったものが、後半になると青面金剛が主尊として刻まれるようになり、施主名も個人名から講中の名を刻むようになるが、それは講の成立をうかがわせるものであるという。そして造立数は一七世紀中頃から一八世紀にかけて急速に増加する。論者はその社会的背景について、検地にともなう土地所有体系の整備によって「家」の成立がみられたこと、新田開発によって新田村が各地に成立し、小農自立の傾向があらわれたことをあげている。また編年的分析にもとづいて、庚申塔の最も古い型式が江戸にあらわれることから、庚申塔の諸型式が江戸から地方に普及したものとし、その急速な普及については運輸手段の整備が背景にあったとする。その際に水運による地域と陸運による地域とでは違いがある。とりわけ利根川流域の河岸の整備と庚申塔の普及過程との間には関係があると推測している。近世後期になると本来、供養塔であった庚申塔の意味は大きく変化する。

第八章「近世後期の庚申塔にみる石造遺物の盛衰」では、石造遺物の盛衰の過程をたどりながら、近世社会の復原を試みる。

一八世紀後半から一九世紀にかけて庚申塔の造立数が大幅に減少し、様式にも簡素化の傾向があらわれる。論者はその変化を近世後期の民間信仰や社会変化によって説明する。減少の理由として、「五人組帳前書」などから読み取れる幕府の石塔造立の禁令をあげ、石橋の寄進や道標にともなう庚申塔が出現することによって、庚申講が次第に信仰集団から世俗的な集団になり、村を単位とする公共的な役割を担う集団に変化したと論じている。

近世後期になると庚申信仰は富士信仰との関係を深め、信仰から道徳的な思想へと変化していく。その過程で庚申塔の様式が簡素化し、造立数が減少する。庚申塔の造立意義が失われ、その造立数が減少するのに対して、顕彰碑や句碑などの石碑がさかんに建てられるようになる傾向を、論者は宗教の世俗化として位置づけている。

審査要旨

本論文で取り上げられている近世庚申塔は、従来いわゆる石仏・墓石などの石造遺物の研究や民俗学の分野において扱われることが多く、庚申信仰という民間信仰のあり方を示す資料としての見方に留まる傾向が強かった。従って、庚申塔自体が考古学や歴史学において研究対象とされることはほとんどなかった。こうした研究状況において、論者は主に考古学の立場から、近世庚申塔のもつ多様な資料性を見直した。そして、その独自の分析を通して得た知見を歴史学や民俗学の成果と対比させ、近世村落史、民間信仰史を明らかにするという、全く新しい試みを行なった点は本研究の大きな特長である。

その中で論者石神裕之君は、東京都区部とその周辺地域の広い範囲から膨大な量の庚申塔の資料を集成し、これらに対して

自らの基準による型式学的な分類を行い、定量的に分析することによって、時間的な変遷や空間的な変異を客観的に導き出している。このような方法で、編年的秩序を読みとり、地域的な特徴を把握していく手法は、考古学的方法として正当なものであり、これによって、近世史の研究において庚申塔が歴史学的資料として、充分に有効性をもつことを示すのに成功した点は、本論の最も高く評価できるところである。

そうした本論の価値を認めた上で、論者の今後に期待を込めて意見を言えば、その分析結果による歴史復原には今後、なお一層の進展の余地を残している。庚申塔の編年、造立数の変化を近世史の一般的傾向によって説明するだけではなく、それらが江戸の社会史の諸相を新たに掘り起こすことになることを期待したい。また、庚申塔の造立数や型式の変化に関する編年的研究の結果を、物資輸送網の発達、新田開発にともなう小農自立など、既知の歴史的諸相に照らして説明を試みているが、考古学的資料の分析結果が独自に新たな近世史の地平を切り開くところまでには至っていない。論者自身がいくつかの課題を提示しているだけに、今後の研究のさらなる進展に期待したい。

しかしながら、本論文は、庚申塔の型式・像容という物質文化的側面に着目した考古学的方法と、銘文という史料的側面や文献史料にもとづく歴史学的方法に加えて、民間信仰史や民俗学の知見と重ね合わせるという、学際的・総合的方法をとることによって、斬新で優れた研究のレヴェルに達していると判断される。そして、これによって近世庚申塔の歴史学的資料としての意義を、新たな角度から高めたとする見解は、審査員一同の間で一致したものである。よって、本研究論文の著者、石神裕之君は、博士（史学）の授与に相応しいと判定する。

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学　文学部教授　阿部祥人
副査　慶應義塾大学　名誉教授　近森　正
副査　早稲田大学　人間科学部教授　谷川章雄